



映画に
宛てた
ラブレター

2013・6月号

天見谷行人

ごあいさつ

映画レビュー集「映画に宛てたラブレター 2013・6月号」をお届けします。今月から、毎月1回、5日に発行を予定しております。当初は、パプーの連載機能を使ってみたのですが、当方の知識不足なのか、全くうまく使えませんでした。

本日2013年6月5日に一旦、本レビュー集の連載を始めたのですが、表紙が表示されない、クリックしても、本文に容易に辿り着けない、という不具合が発生致しました。

それでも、わざわざ、お読み頂いた方には、大変お手数と、ご迷惑をおかけ致しました。深く、感謝とお詫びを申し上げます。

そこで、内容をそのままに「読み切り本」として、6月号を急遽作ってみました。

ドタバタで始まった企画ではございますが、「ついさっき、観て来たばかり」のホットな作品レビューをお届けしたいと思っております。今後ともよろしくお願い申し上げます。

なお、私、天見谷行人は、Yahooブログにて「のぶりんブログ」というサイトも設けております。

<http://blogs.yahoo.co.jp/mussesow>

お気軽にご覧頂き、コメント等頂けると嬉しいです。

2013年6月5日 天見谷行人

天使の分け前

2013年5月16日鑑賞

*** 映画の香りを嗅ぎ分けてみよう***

ケン・ローチ監督の作品は一度でいいから、スクリーンで観たいと思っていた。

「エンジェル・シェア、天使の分け前」

きれいな言葉だ。

ウイスキーを樽で何年も熟成させると、毎年少しづつ蒸発してゆく。天使達が毎年少しづつ、神様へ酒の精、スピリッツを運んでゆく。（ウイスキーは、スピリッツ「魂」とも呼ばれる）

それはよいウイスキーを創るための神様への捧げ物。酒の神様への感謝の気持ちが「天使の分け前」という言葉を作ったのだろう。



本作は、そんな、ほんわかしたイメージとは程遠い現実の世界、それも人間世界の底辺で暮らす、世間からクズ扱いされている若者が主人公だ。

主人公ロビーは住所不定の無職の若者だ。

ちょいとした盗みや喧嘩は日常茶飯事。

そんな彼にもガールフレンドがいる。

その彼女に赤ちゃんができてしまった。

自分は犯罪を犯して、裁判所から社会奉仕、何百時間と言う判決まで受けている。

そんな彼をガールフレンドの父や親族が認めるはずもない。

どうすりゃいいんだ、と彼は悩む。

やっぱり自分の赤ちゃんはかわいい。

ロビーは社会奉仕活動に参加する。やり直してみようと思う。保護司ハリーの元で、建物のペンキ塗りなんかをやってみたりする。そこそこ、まじめに働く彼をみて、保護司ハリーは彼をウイスキー醸造所へ連れて行った。

ハリーはウイスキーの利き酒を趣味にしていたのだ。ためしにロビーはティスティングをしてみる。するとどうだろう、彼はとんでもなく敏感な嗅覚の持ち主である事がわかる。これには本人も保護司ハリーもビックリ。

やがて彼は、自分の優れた能力で、仕事がしてみたいと思う様になる。なにより愛する妻と子供のために、仕事をしなけりゃと思うのだ。



この作品、僕が見て感じたのは、酒というものは、やはりそれぞれの銘柄にそれぞれのドラマがあり、さらには酒はお国柄を表す象徴的な存在ということだ。まさに「スピリッツ」「魂」を感じる。

この作品はイギリス映画と言う事になっているが、ご承知の通り、イギリスと言うのは、イングランドや、北アイルランド、ウェールズ、スコットランドという「ランド」同士が集まってできた連合王国である。昔、お互いが血で血を争う様な戦さをやってきた仲なのだ。

スクリーンを見ていると、登場人物がしゃべる言葉が、イングランドで話される言葉でないことに気づく人も多いだろう。

その土地で話されるお里の言葉なのである。

その土地を愛し、その土地で取れた材料で酒を作る。

人々は祈りを捧げ、酒の神が降りてくれるよう願う。

僕は最近気になっている事がある。

人と、モノと、価値の関係である。

まさに神が舞い降りたと思われるウイスキーの樽。その珍しい貴重な逸品ウイスキーのオークションシーンがある。

みるみる値が上がり上がってゆく。ただの酒に、どうして百万ポンドなどという、とんでもない値段、価値をつけるのか？

日本の落語に「はてなの茶碗」というのがある。ある油売り屋が手に入れた茶碗。それは傷もヒビもないのに、なぜか水がポタリ、ポタリと漏れる。いわば欠陥商品である。珍しいこの茶碗は、やがて日本一の茶道具屋の手に渡り、お公家さんの間で評判になり、そしてついに、時の天皇の手に染まり、それを豪商が千両という値段で買い取ろうとするお話だ。

元を正せば水の漏る「欠陥品」「不良品」なのだ。

それに千両の値打ちがつく。

いったい価値とはそもそも何なのだろう？

今も僕は手探りで自分なりの答えを探そうと、もがき続けている。

人間だって同じだ。

ゴミダメの中にいた本作の主人公。

その並み外れた嗅覚能力は、その才能が活かされるステージに出れば、立派に価値ある人材と認められる。

ところが、

「本物かニセモノかなんて、だれも分かりゃしないさ」

オークションの前日の夜、貴重な樽の所有者と、別の醸造所の経営者がこっそり密談する場面がある。

「うちの樽※※個と交換しないか？ 悪い取り引きじゃないさ」

物の値打ちを弄ぼうとするのも人間だ。

価値の問題や善悪の基準というもの。

それに連合王国で有るイギリスと言う国の特殊性、お国柄など、本作はまさに、芳醇なウイスキーを感じさせるように、複雑で豊かな香りが漂う。

映画の解釈と言うティスティングは、我々観る側の映画の嗅覚を試されているかのようだ。あなたは本作にどんな香りを見つけるだろうか？

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 ケン・ローチ

主演 ポール・ブラニガン、ジョン・ヘンショウ

製作 2012年 イギリス、フランス、
ベルギー、イタリア

上映時間 101分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

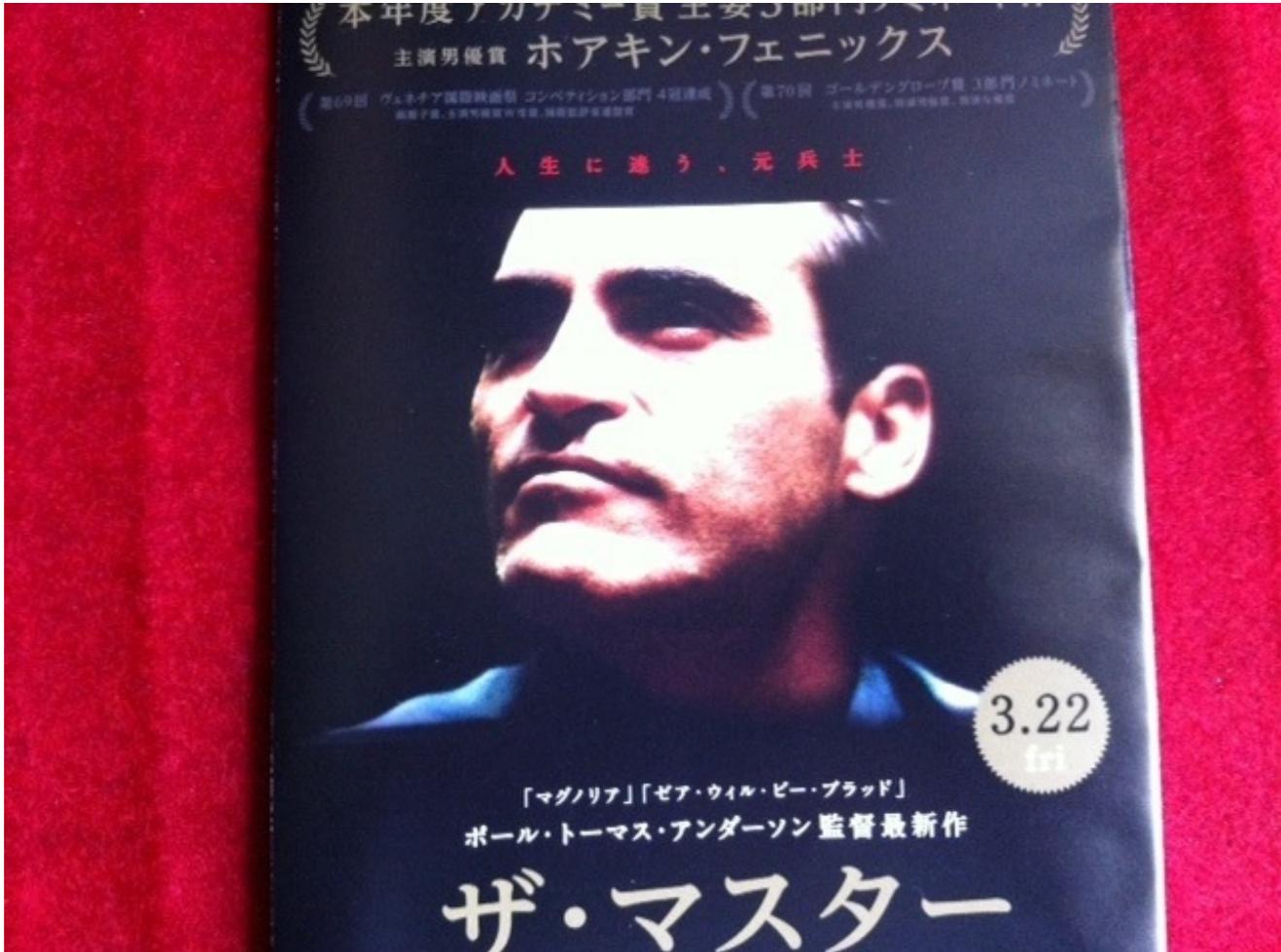
<http://www.youtube.com/watch?v=ujwZkTSDCFc>

2013年5月13日鑑賞

彼こそ我が全て、でいいの?

フィリップ・シーモア・ホフマンの演技が見たくて映画館に足を運んだ。今回彼が演ずるのは、心理療法家であり、哲学者であり科学者でもあると言う、ちょっと怪しいカルト集団の中心人物。

なお本作の主人公は彼ではない。その心理療法家に心酔してしまう男フレディ（ホアキン・フェニックス）が主人公である。



フレディは第二次大戦に従軍した。そして心にキズを負った。そのキズが癒える事なく復員。やがて彼は写真技師として仕事を始める。高級デパートの一角で来場客相手に

「はい、撮りますよ、笑って〜」

パシャッとシャッターを切る。

愛想笑いも振りまく。そこまではいいのだ。

だがどうにも肌に合わない客がいた。客には何も落ち度がない。ただ彼の方が一方的に、客に敵意を持ったのだ。

フレディは客をいたぶり、いじめた挙げ句、大げんかとなる。デパート内は大混乱。当然、出入り禁止となり職を失う。

他に色んな仕事をやってもみても、うまく他人と関われない。そんな時、たまたま心理療法セミナーを開いていたマスターと呼ばれる男に彼は出会う。

マスターは被験者をソファに寝かせ、いわゆる前世療法を施す。マスターは本も書いている。これは結構売れていて話題になった。新聞記者も取材にやってくる。

「これは科学的じゃないと思いませんか？ カルトじゃないですか？」との質問に笑顔でサラリ、とはぐらかしてみせるマスター。

彼の取り巻きはそんなに多くない。家族とごく少数の仲間達である。決して大きな教団等ではない。

この作品は、主人公の眼からマスターを見る視点でつくられている。マスターはあくまで紳士的だ。

決して強引に組織を大きくしようとはしない。

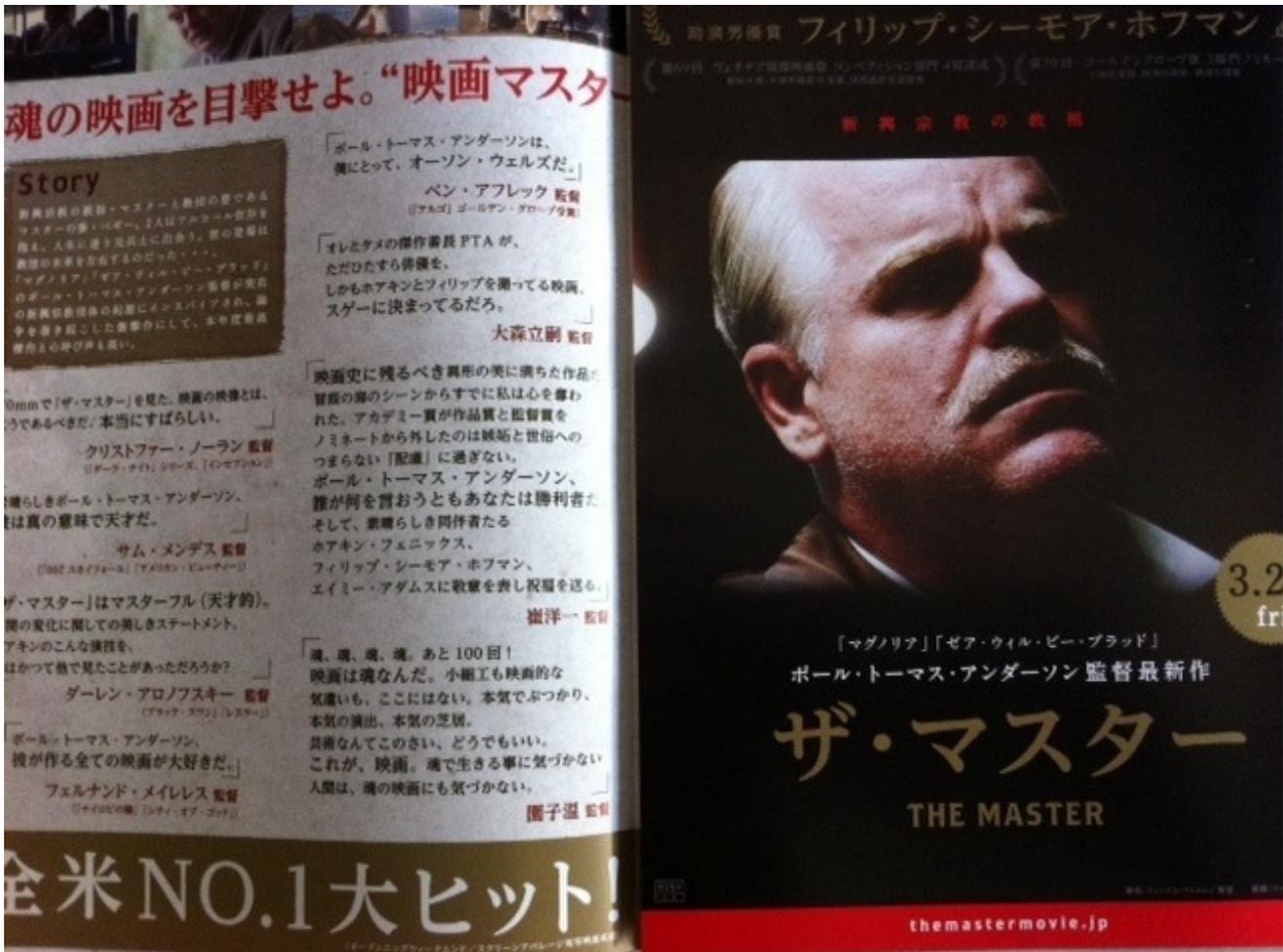
慈善事業のようにも見え、そのくせ富裕層との付き合いも大切にして、そのポケットから、さりげなく収入を得ているようだ。

このあたりの描き方がケレン味がなく、じつにうまい。

マスターの心の舞台裏、本音の部分を映画は敢えて見せようとはしない。

だからよけいミステリアスだ。

そこにこそ、マスターが人を惹き付ける魅力が隠されている。主人公はやがて「この人となら、どこまででもついて行く」ぐらいの気持ちになってくる。そしてマスターを独占したい様な衝動に駆られてゆく。



男が男に惚れるのは、本当にタチが悪い。

それはかつてオウム真理教の麻原の言葉に、多くの若者が心酔した図式に似ている。

オウムの若者達にとって、教祖麻原から声をかけてもらえた、ホーリーネームをもらった、教団

内での位が上がった、なんて事になったら、それこそ羨望と嫉妬の的だ。

まるでオンライン・ネットゲームで、キャラクターの名前に変身し、どんどんレベルを上げてゆく、その感覚。

このゲームだけは他人に負けない、負けたくない、他人から認められたい、他人に自慢したい。このゲームだけが自分の全てなのだ。

あまりにも世間知らずの、平凡で、いい子で、人を疑う事を知らない、素直な人ほど、こういうカルトにのめり込んでしまうのだろう。

主人公フレディの安らげる、唯一の心の置き所は、マスターの存在そのものだったのだろう。

もちろん僕は思想、信条、宗教の自由は大切だと思う。日本国憲法はそれを認めている。

大切なのは、他人の考え方や、信じる事、価値基準が、それぞれ違う事を認める「懐の広さ」を持つ事だと思う。

違う大義で生きている人達もいるという事だ。

違う大義が衝突すると悲劇が生まれる事を、我々は既に体験している。

そこから何を学ぶのかである。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

映像 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 ポール・トーマス・アンダーソン

主演 ホアキン・フェニックス、
フィリップ・シーモア・ホフマン

製作 2012年 アメリカ

上映時間 138分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=HVOWSsgtz4k>

図書館戦争

2013年5月13日鑑賞

発令する、図書館を死守せよ！

命がけで本を書く人は多くいる。命を削るようにして本を書く。

たとえ売れない、一般受けしない、とおもえても、書くべきだと判断すれば作品を書く。本当の作家とはそういう人たちだ、と僕は思う。

では命がけで本を守る人はいるだろうか？

僕は紙の本が好きだ。

今や電子書籍が当たり前になった。

もちろん僕も電子書籍は利用している。

読むだけではなく、自分で雑文を作り、電子書籍サイトで公開もしている。

「しかしなあ」と思う。

やっぱり紙の本は特別なのだ。

一冊の本を手にとってみる。

その表紙の手触り。ズシリとした重みは、まるで作者が込めた想いが伝わってくるようだ。

そして、ページをめくる時のかすかに感じる紙の香り。

正に紙の本は、それ自体が、人間の五感を刺激する、エキサイティングな芸術作品だと思う。

もちろん僕と同じように感じておられる方は多いと思う。



本作はそんな「紙の本」を愛して止まない人達のために、紙の本と図書館を守る人達を描く。

このお話は有川浩さん原作。

この人はミリタリーオタクだと噂で聞く。ならば、この作品のよりどころとなる、自衛隊の行動規範等を守って、脚本作りをするべきだろう。

民間企業でもそうだが、自衛隊のような軍に準じる組織ならば（実質、自衛隊の規模、装備は明らかに軍隊である）上官の命令は神の声であり、絶対だ。

上官に意見具申したければ許可が必要である。

それを全く無視しているのが、防衛組織としてのリアリティに欠け、ストーリーに締まりがないのだ。

仮に、あなたが「図書隊」の隊員だとしよう。

あなたは図書館を守りたい。

今、まさに戦闘行動中だ。

しかし、上官の命令が気に食わない。そこであなたは自らの判断で、9mm機関けん銃、通称「エムナイン」を手に、敵に華々しく突撃する。

その結果、無謀な突撃をしたあなたを守ろうと、他の同僚が死傷したらどうなるか？

誰が責任を取るのか？

実は「命令を下す」という行為は、部下の命を左右しかねない、極めて重い責務なのである。

だから命令した者はそれこそ「ハラキリ」覚悟で命令する。

全責任は「発令者」にあるのである。

映画も同じである。

「監督」は映画製作の全責任を負うのだ。その覚悟があるからこそ、自分より年齢も上で、大ベテランのカメラマンや、照明、録音、美術、音楽等の熟練スタッフに「発令」し、無理難題が言えるのである。

さて、本作の見所は、やはり終盤、特務機関と図書隊との銃撃戦。そして、岡田准一氏のキレ味鋭いアクションシーンである。

ジャニーズ・タレントを舐めてはいけないのだ。実際、彼は数種の武術の免許をもっているそうで、このシーンは見逃せない。

この作品は、紙の本を命を賭けて守りたい。そんな本を愛する人達のために作られている。もちろん原作の有川浩氏も紙の本が大好きなのだろう。

未来ある子供たちに、素晴らしい紙の本を届けたい。そんな想いが一杯詰まったこの作品。その根っこに流れる「こころざし」の高さは、正當に評価されるべきだと僕は思う。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆

演出 ☆☆☆

映像 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 佐藤信介

主演 岡田准一、榮倉奈々、石坂浩二

製作 2013年

上映時間 128分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=UJpZfBH5M2k>

2013年5月25日鑑賞

マコは、うーやん、いっぽん、だいすきだよ

悲劇であるのに、どこかユーモラス。重い内容なのに、どこか軽やか。

徐々に味わいのある邦画を観たなあ、と思える作品である。

物語りの舞台は、知的障害の人達が集まって住んでいるグループホーム。

ロケーションなし。

ほとんどのシーンが、ホームの中。

リビングでの会話で成り立っている、室内劇の形式だ。



邦画で室内劇の秀作といえば「今度は愛妻家」、アイドルの怪死をめぐるサスペンス喜劇「キサラギ」、それに三谷幸喜監督の「笑いの大学」などが思い浮かぶ。

本作の堤幸彦監督は「20世紀少年」をはじめとして、アクション映画がお得意と思われがちだが、渡辺謙主演の「明日の記憶」も手掛けた。ジックリとカメラを据えて、人間ドラマを描ける監督さんでもある。

ヒロインのマコは貫地谷しほりが演じる。

僕は「スウィングガールズ」の時から彼女のファンである。朝の連ドラ「ちりとてちん」でその実力を見せつけた。

ぼくはかつて彼女の人物レビューに

「どんな過酷な環境でも確実にエンジンがかかる便利なスポーツカーである」と評した。

いつも感じるのだが、この人、周囲の期待を裏切らない。

どんな役でもこなして見せる。

脚本家や監督の狙った演技プランを、いともやすやすとやってのけてみせる。

だから、使いやすい「便利な女優」で片付けられてしまう恐れがあった。彼女の最大の長所が最大の弱点でもあった。

貫地谷しほりでしか演じられない、このキャスティングしかあり得ない、というところまで行き着くのか？

「ちりとてちん」はまさにそれだった。

本作ではどうだろうか？

マコの父親は竹中直人が演じる。

「愛情いっぽん」というペンネームで、過去にヒット作も世に出した事のある漫画家である。だが今はマンガをやめてしまった。

妻とも死別し、知的障がいをもった娘マコを育てるために、自分の生活の大部分を費してしまっているのだ。今はチラシのイラストを描いて生活を支えている。

障害を抱えたマコを父親いっぽんは、色んな施設を渡り歩き、ようやく安住の地を見つける。そこがグループホーム「ひまわり荘」だった。

ある事情で、マコはいっぽん以外の男性を怖がる。

だが、このホームだけは違った。マコはこのホームに馴染んでゆく。それどころか、仲間の「うーやん」（宅間孝行）と結婚するとまで言い出すのだ。

映画の後半、いっぽん（竹中直人）とマコ（貫地谷しほり）が、二人でソファに座っているシーンが印象的でいいなあ。

月明かりが二人を照らす。儂く淡いブルーの照明、まるでキタノブルーを思わせるシーンだ。

心の琴線に触れる、という言葉があるが、音楽もこの作品の重要な要素だ。

ハーブのポロリ、ポロリと爪弾かれる音の粒は、とてもピュアで、作品が持っている彩りと雰囲気、より高い次元に運んでくれる。



この作品を観ながら、僕はふと命の重さの事を思った。

それはぼくが五十代を超えたこと、数回も救急車のお世話になったこと、全身麻酔で二回手術台に横たわった事、そして亡き母の生存年齢を、すでに超えてしまったことによるのであろう。

考えてみよう。

蟻一匹と蚊一匹の命は、どちらが重いだろうか？

可愛いペットである猫一匹と、犬一匹の命はどちらが重いのか？

そして健常者と障害者の「いのち」は、どちらが「軽い」のか？

ぼくにはわからないのだ。

むしろ両者を天秤にかけける行為、そのものが、神と呼ばれるこの世界の、原理原則に背いているとしか思えないのだ。

障害を持った人を看護するというお話では、ミヒャエル・ハネケ監督の「愛、アムール」がある。

正直ぼくは、あの重く悲しい作品を見るのが辛かった。あそこまで観客に、辛い思いを共有させる事は如何なものかと思った。

障害を持った年老いた妻を、これも年老いた夫が介護する、老老介護をケレン味なく描いた。淡々と描かれる悲劇は、重く苦しい。パルムドールに輝く作品であっても、僕は決していい映画作品とは思わない。

よほどこの「くちづけ」の方が、映画作品として洗練されている、と僕には思えるのだ。

この作品で知った事がある。刑務所に入っている服役者のうち、五人に一人が知的障害者だという事。

街中を大きなビニール袋を抱え、ヨロヨロ歩く薄汚れたホームレスの多くは、知的障がい者である事。

そして犯罪を犯したと見なされ、運悪く逮捕されてしまった知的障害者は、えん罪に陥れられる恐れが極めて高いことだ。

障害者を家族に抱えるということや、障害者の性、結婚、そして障害者の犯罪という極めてデリケートな内容を、作品として昇華させた宅間孝行の原作、脚本が光る。

哀しいけれど美しい、そして残酷であるのに軽やかさを感じさせるこの作品。

初の主演でこのような難しい役どころを演じあげた貫地谷しほり、そして竹中直人にぼくは拍手を惜しまない。

なお劇場でご覧になるときはハンカチをお忘れなく。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 堤幸彦

脚本 宅間孝行

主演 貫地谷しほり、竹中直人

製作 2013年

上映時間 123分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=LoBkAi0m4tl>

2013年6月3日鑑賞

*** 辞書を編むと言う「狂気」 ***

不思議な余韻が残る作品である。

抑制の効いた演出、石井裕也監督の静かな決意と情熱を感じる作品となった。

なにより松田龍平がまさか、こんなオффビートな演技ができる人だとは思わなかった。

テレビドラマ「ハゲタカ」での印象が強かったのだ。

強い眼力。切れ味鋭いシャープな人物像、そういう役が、この人にはハマリ役だと思ってきた。

父、松田優作のDNAを引き継ぐルックスと演技。僕を含め周りの人達は、彼をそういう眼で見えていたと思う。

しかし、父松田優作は森田芳光監督の「それから」（原作 夏目漱石）と言う作品で、明治の高等遊民、代助という人物像を見事に演じあげ、「それまで」の松田優作のイメージを一変させた。

息子である松田龍平にも、ついにその時がきた、と本作は思わせる。父が辿った道を、彼は今、自分なりに乗り越えようとしているかの様だ。

本作では「それまで」の松田龍平イメージを封印し、エッジの効いた演技ではなく、あくまで穏やかな人物像を演じて見せている。



このお話は一冊の辞書を作る人達の物語りである。

世の中にはゴマンと言葉が溢れている。

まさに言葉の海だ。その大海原を泳ぎ渡るのに辞書はかせない。

本作が扱うのは、そのなかでも紙の辞書である。

たくさんの言葉を収めた辞書ほど、ページは増える。本の重さも重くなる。ネットで検索する辞書とは感覚がまるで違うのである。

一つの辞書を完成させるのに、主人公たち、辞書編集部は十年以上の時間をかける。

気の遠くなる様な作業だ。

しかし、焦りは禁物である。

間違っただけの言葉を収めた辞書は世の中に出せない。

何度も何度も校正を重ねる。

分り切った事だが、かなり地味なお話だ。これが果たして映画になるのだろうか？と最初は不安に思った。

辞書を引くという作業。辞書をめくるときの、知的な興奮。

僕は結構好きだ。また、探したい言葉を探す途中、いろんな言葉を寄り道して眺めるのも、辞書の大きな楽しみだ。

たとえばハンディサイズの辞書では載っていない言葉を、広辞苑などの大きな辞書で引いてみる。するとまた、新たな発見がある。まさに、言葉の海の中で宝探しをやっている雰囲気である。この作品で嬉しいのは、こういった紙の辞書ならではの、こだわりのシーンがあることだ。

辞書に使われる紙を選ぶシーンがある。

大変なページ数に及ぶ辞書には、当然薄い紙が使われる。だが、薄ければいいわけではない。裏の文字が透けないこと。そして、ページをめくるときの指に吸い付く感覚。松田龍平演じる主人公はその質感にこだわる。

辞書に限らず紙の本の素晴らしさは、まさにここにある。

ページをめくる時の紙の手触り。紙がシュッとこすれる音。微かに感じる紙の香り。

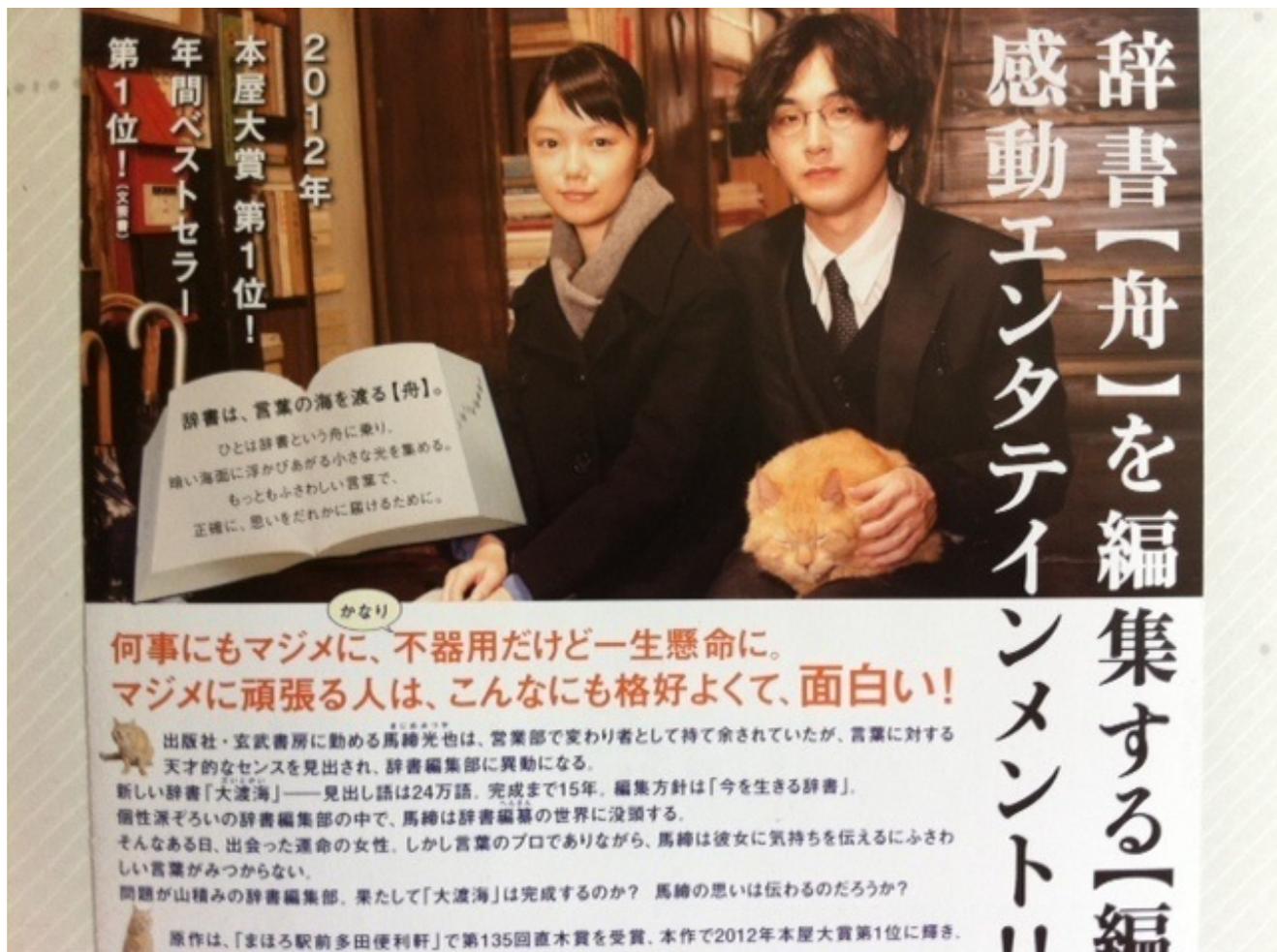
そして、本や辞書を手にとった時のズシツとした重み。

まるで、著者や辞書の編集者達の想いがギッシリと詰まっているかのようだ。

紙の本は、正にそれ自身が、人間の五感をフルに刺激してくれる、エキサイティングなアート作品なのだ。

ひとつの辞書、それ自体がアート作品だとすれば、その製作過程を映画に撮る。

これは映画作品として成り立つのだ、と改めて思った。



この作品の素晴らしさは、まるで小津安二郎作品をみているかのような端正さである。

なによりいいのは、思わせぶりなところが一つもない。

ここで、感動させてやろう、といった作為を、敢えて押し殺しているかのようなようである。その静謐なタッチは、作品のラストシーンまで淡々と、しかし、力強く貫かれている。

辞書を十数年かけて作る人達は変人だろうか？

本作を観て感じるのは、辞書を「編む」人達の静かな、持続する「狂気」である。

かっこいい言葉を使えばエモーションである。

その辞書作りのエモーションを、カメラに焼き付けることができないか？ おそらく、監督の狙いはそこにあったのだろう。

松田龍平のオッフビートな演技も、月夜に現れた宮崎あおい演じる香具矢の静かな佇まいも、作品を観終わったあと、すべて石井裕也監督の静かな狂気を帯びたエモーションの成せる業なのだと気がついた。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

- 物語 ☆☆☆☆
- 配役 ☆☆☆☆
- 演出 ☆☆☆☆☆
- 美術 ☆☆☆☆
- 音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 石井裕也

主演 松田龍平、宮崎あおい、オダギリ・ジョー

製作 2013年

上映時間 133分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=0kwCc-1o1lc>

映画に宛てたラブレター 2013・6月号

<http://p.booklog.jp/book/72507>

著者：天見谷行人

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mussesow/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/72507>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/72507>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ